

断簡五

しうや りふかふ

「畢竟、結論から言えば、小生らはできることをやるしかない」

「限界を超えて新たな地平を見出し、自らの頭頂を踏んでその上に昇るかのように、常に自己超越すべきが人だと思います」

「むろん、そうだ。だが、それが結果的にできたなら、それはできることの範疇にあつたことになるんじゃないのか。だが、むしろ、早蕨よ、私は君がそうすべきだと思う根拠を聞きたい」

「ありません。言葉はまやかしですから。無明です。その起源は欲望で、その根源は生存への意志で、言語も概念も論理（という手段も何の本質も根拠ありません）

ただ、ただ、効果を狙っただけの現象です。狙いをそのとおりに実現できる御方が目的達成のために作つた仮架だからです」

「ま、その根拠もないし、それがそもそも論理を使用した思考だがね。

君の言っていることは、結局、小生の主張と実態として同じことだ。

早蕨よ、君の言うとおり、いかなる意味に於いても検証ということは不可能なのだ、論理思考を用いては。だが、論理思考以外に何がどうできるだろうか？

在りはしない。意識が意識された瞬間に、ほら、もう既に論理思考だ。検証されなくとも、現に今、もう始まつてしまっている。

もし仮に、そうでなかったとしても（検証ということが可能であつたとしても）、次の疑義がいくつもある。例えば、なぜ検証は真実であることを保証するか、などだ。

君は、その問いに答えられるか。いや、答えられる者はたくさんいるだろう。だが、無条件で是認された前提なしの純粹論証に於いてできる者はいない。

どうにも根拠は晰らめられないが、かと言つて意識は既に出発してしまつているし、諸々の現実の現象は次々と前を過つて逝く。

理屈も理由もない。行かないわけにいかない。いや、既に逝つてしまつている。『ぎおうてゑめ、ぎおうてゑめだ。逝ける者よ、又は逝くときに於いて、だ』

「追究できる究竟までしか追究できない。でも、進むしかない。いや、もう進んでいる」

「そう、そう。つまり、それが、小生の言うところの『できることをやるしかない』という意味だ」

「解りました。言うまでもないとは、まさにこのことです。もうそういうふうをやっちゃつていながら、今更何言つてんだか、つて感じた。いや、失礼いたしました」